

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 7 月 27 日	
所属部局・職	アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ専攻博士 1 回
氏名	横塚 彩

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
日本モンキーセンター、愛知県犬山市
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
動物園・博物館実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 7 月 14 日 ~ 平成 26 年 7 月 17 日 (4 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
日本モンキーセンター
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
日本モンキーセンターでは、主に学芸員の方々にお世話になり、動物園(博物館)が動物を見せるということ以外に担っている役割について4日間を通してレクチャーしていただいた。 初日は伊谷園長から日本モンキーセンターと霊長類学の歴史について説明していただいた。初期の類人猿アフリカ調査は実は買い付けが目的だったこと、サルの文化と認知科学が別物としてとらえられていたことに衝撃を受け、現在の霊長類学に至るまでに様々な変遷があったことを改めて知る機会となった。
スタッフ会議に出席させていただき、飼育スタッフの方々の実習報告を聞いた。特に印象に残っているのは、熊本サンクチュアリ訪問の報告で、熊本サンクチュアリで取り入れている放水ホースのハンモックなどを、日本モンキーセンターでも取り入れたと報告されており、改善できるポイントをすぐに取り入れていて飼育動物の環境改善に力を入れている印象を受けた。 日本モンキーセンターでもアニマルエンリッチメントに力を入れており、マカクのためのおもちゃを竹を切って制作した。無駄な予算はかけず、今あるものを利用してよりよい環境を作ろうと努力されているのだなと感じた。
学芸員のお仕事として、標本管理の実習を行った。死亡したサルを解剖したあと、内蔵をホルマリンにし、骨は骨格標本として保管している。獣医師さんによる解剖の見学とホルマリン液の交換作業、骨格標本のラベルつけ作業を体験させていただいた。骨は埃と間違えて捨ててしまいそうなくらい小さな米粒以下のパーツもあり、生きた姿でなく骨になった姿で動物と向き合うととても繊細で、小さな骨でも重要な役割を担っていることに気づいた。
最終日には中学校で行われた出張講義を見学させていただいた。啓発活動も博物館の大切な業務であり、モンキーセンターにきてもらうだけでなく、積極的に学校に出向き、講義を行っていると同様だ。 中学生にレプリカのチンパンジーの骨と人間の骨を観察してもらい、各班で相違点を発表するという授業内容だった。生徒はみんな真剣に授業を受けており、学生側もモンキーセンターのスタッフ(学芸員)としても授業を通して近い距離で対話していくことで、博物館としての動物園の役割を行っていた。
日本モンキーセンターへは、以前に何度か足を運んだ事があったので、飼育員さんがどんなお仕事をされていて、学芸員の方たちがどのようなことをされているのか実際に伺う事ができ、他の動物園で実習を行うよりも個人的にとっても興味が湧いた。お客さんとして行っていると見えない小さな努力がたくさんあると思ったが、飼育員の方たちも学芸員の方たちもすごく生き生きとお仕事をされているのが印象的であった。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

●竹を切って作った筒で遊ぶ●



●中学校での授業風景●



6. その他 (特記事項など)

赤見さん、高野さんをはじめとした学芸員のみなさん、飼育スタッフのみなさまありがとうございました。